

第十稿

帷子川（横浜駅周辺の新田開発と河川の歴史）

大岡川編（第七・八・九稿）では、新田開発をきっかけとした河川改修の歴史について紹介しました。横浜には、大岡川以外にも、新田開発が行われた歴史があります。

第十稿では、帷子編（第三・四稿）の特別編として、帷子川の下流域で行われた新田開発と河川の歴史について紹介します。

1 横浜駅には海が広がっていた!?

江戸時代はじめ、横浜駅周辺は、保土ヶ谷区・天王町付近を河口に、「袖ヶ浦」という海が入り込む内湾でした。「袖ヶ浦」は、東海道中では景色の綺麗な入江として知られ、ここに河口をもったのが「帷子川」です。

当時、帷子川の河口は、木材などを積み出す港として栄えていましたが、上流から流下する土砂の堆積が、河口を浅くしたことで、水害が頻発し、川沿いの村々は常に河川の氾濫を恐れていました。特に、宝永4年（1707）の富士山噴火では、大量の降灰が流れ込んだことで、川岸が埋まり、伝馬船で川浚いをしなければ船着きもできない状況となりました。これを受け、享保16年（1731）には、幕府直営の河川改修が行われますが、その後も度重なる氾濫に見舞われ、帷子川流域の村落の疲弊は増していきました。



袖ヶ浦が広がる時代の横浜周辺とその後の発展(位置図)



A 東海道五拾三次 神奈川・台之景

宿場の中心で旅籠屋が軒を連ねた神奈川宿から袖ヶ浦を望んだ風景で、現在でいう神奈川駅付近から、横浜駅西口方面を望んでいます。享和2年(1802)刊行の「東海道中膝栗毛」でも、「ここは片側に茶店軒を並べ、いずれも座敷二階造り、欄干つきの廊下棧など渡して、浪うちぎわの景色いたってよし」と、絶景の名所として紹介されています。

Column コラム

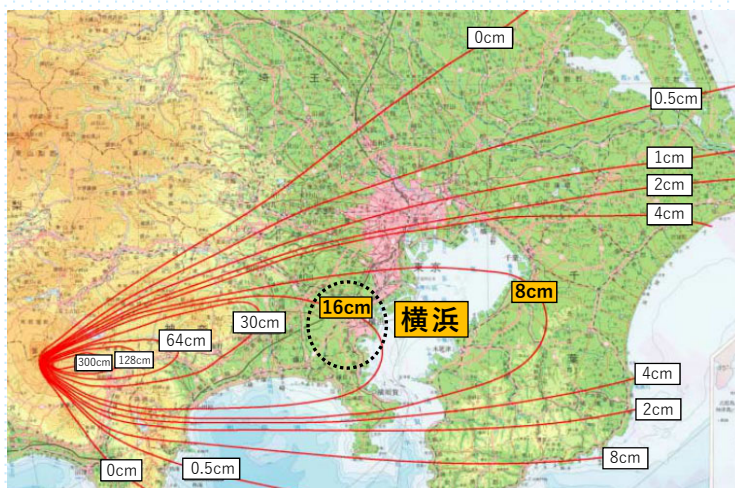
富士山の宝永噴火による横浜市内の河川への被害

富士山の宝永噴火では、大量の火山灰（宝永テフラ）が季節風によって富士山の東側に堆積し、その後の雨により、多くの地域が土砂災害に見舞われました。

大規模な被害としては、静岡県および神奈川県を流れる酒匂川での堤防決壊・洪水氾濫被害が知られていますが、横浜市内の河川でも被害が発生しており、噴火による影響がいかに大きかったかを物語っています。

B 横浜市内の河川における主な被害

河川名	時期	被害
帷子川	宝永～享保16年(1708～31)、以後も継続	河川上昇、河川氾濫、浅瀬の堆積
大岡川	宝永以後(1708～)	河川上昇、用排水路の閉塞、ため池・田畑埋没(永田村)
柏尾川	宝永以後(1708～)	河川埋積



C 宝永噴火による降灰分布図

引用・参考) A: 国立国会図書館所蔵, 「東海道五拾三次 神奈川・台之景」

B: 角谷ひとみ, 井上公夫, 小山真人, 富田陽子, 富士山宝永噴火(1707)後の土砂災害, 歴史地震第18号(2002) 133-147頁

C: 富士山ハザードマップ検討委員会中間報告(2004).

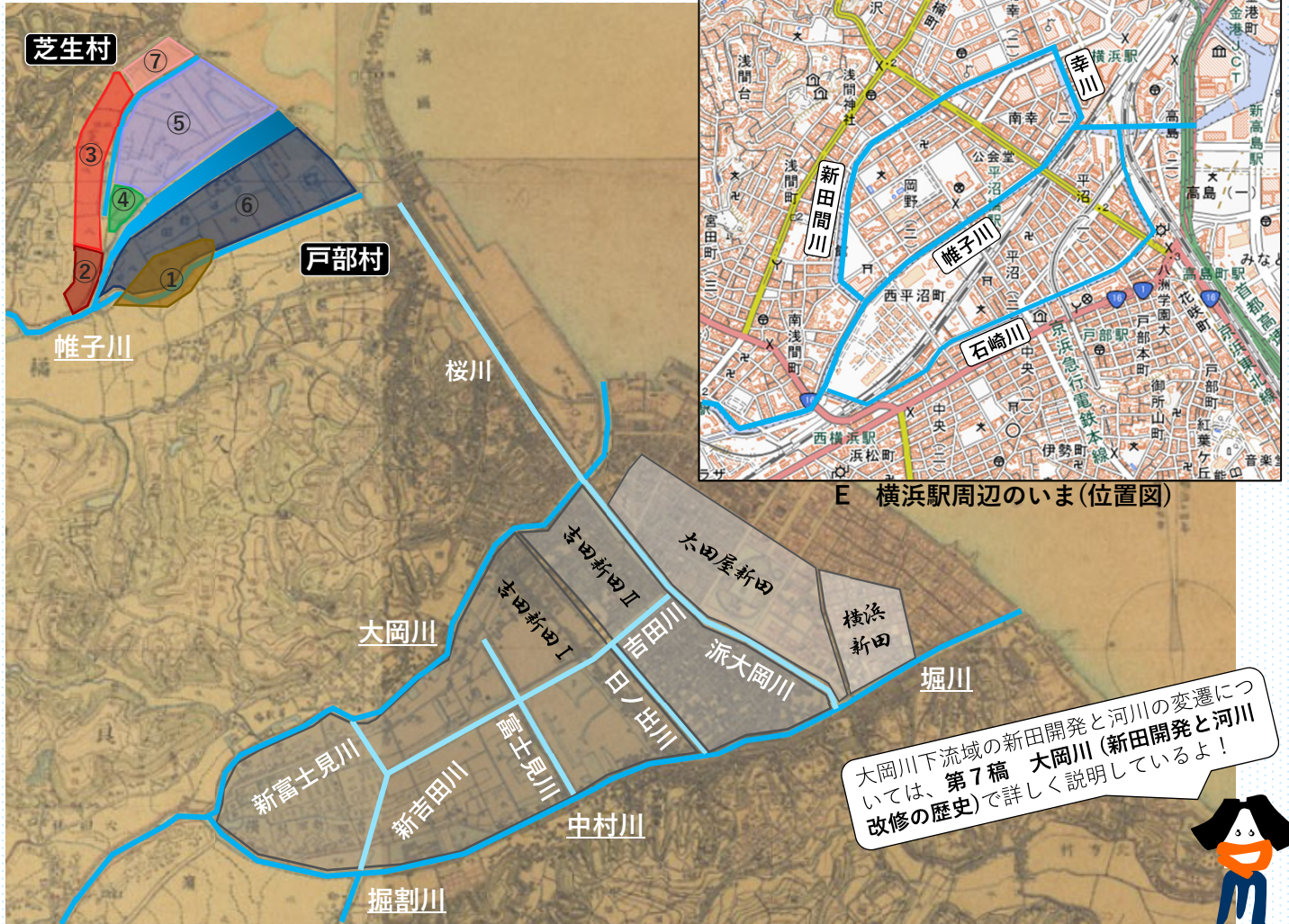
その他イラスト: 河川企画課作成

2 横浜エリアの新田開発の歴史

宝永噴火（1707）により、帷子川から袖ヶ浦（芝生村と戸部村の間の入江）に流れ込んだ大量の降灰は、芝生村（西区浅間町付近）沖の水深を浅くし、次第に寄洲や干潟があらわれ、一帯を新田に開発しやすい場所へと変えました。こうして、帷子川河口付近の新田開発は、江戸時代中期（1751～64）から進められます。

1700年代：河口西側の芝生村に沿うように**宝暦新田**が、河口東側の戸部村（西区戸部町付近）の沖にて**尾張屋新田**が開発されました。その後も芝生村沿いでは、宝暦新田の北側に**安永新田**が、安永新田の東側には、**藤江新田**が開発されました。

1800年代：天保年間（1831～1845）を主に、中心部の広大な新田として**岡野新田**や、岡野新田と戸部村の間に**平沼新田**が開発され、その後、安永新田の北側に**弘化新田**がつけられました。



D 横浜エリアの新田開発と河川(位置図) ※原図は1880年代に作られた関東平野迅速測図

横浜エリアの新田開発の年表

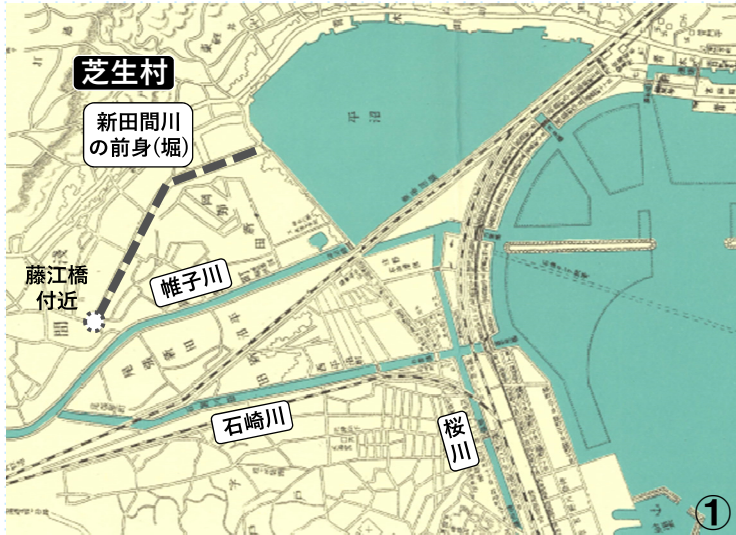
新田名	時期	河川との関係
吉田新田I	宝文7年(1667)完成	
①尾張屋新田	宝暦年間(1751~1764)開始	
②宝暦新田	宝暦4年(1754)完成	
③安永新田	安永9年(1780)検地	
④藤江新田	天明6年(1786)開始	新田間川の前身(用水路)
横浜新田	寛政8年(1796)	
⑤岡野新田	天保7年(1836)検地	
⑥平沼新田	天保10年(1839)開始	石崎川の前身(用水路)
太田屋新田	安政3年(1856)完成	
吉田新田II	慶応3(1867)年	
⑦弘化新田	弘化4(1847)年検地	

Column コラム 新田の利用

帷子川下流域の新田では、いずれも用水に苦労し、吉田新田などの大岡川下流域の新田ほど営農が上手くいきませんでした。芝生村では、川島村（現・保土ヶ谷区川島町）地内の帷子川から水を引いていたものの、使える真水の量は限られており、新田にまわすほどの余裕はありませんでした。戸部村でも、水を引けるだけの河川がなく、雨水を溜める用水池だけを頼りにしていました。

そのため、これらの新田では、水を使わない営農として、塩田による製塩が大部分を占め、ごく一部（岡野新田で少しの畑）で畑作が行われていたとされています。

3 横浜駅周辺の河川の変遷



F 明治42年 (1909)



G 大正9年 (1920)



H 昭和20~25年 (1945-50)



I 昭和36~44年 (1961-69)



J 平成9年 (1997)

「新田間川」は、藤江新田が開発された江戸時代に、用水路として作られ、かつては芝生村の小さな用水堀から排出される水を集めて海へと流していました。当時は、藤江橋付近を上流端とし、帷子川とは繋がっていませんでした。

「石崎川」も、平沼新田が開発された江戸時代に用水路として作られました。明治40年頃は、桜川の河口が石崎川と十字に交わる形で繋がっていましたが、大正初期には、桜川が石崎川の手前で湾曲する形状に流路が変更されています。

その後、大正12年の関東大震災後の復興事業によって、それぞれ帷子川と接続され、現在のように帷子川の派流となりました。かつての新田間川は、内海橋付近と月見橋付近の間にも水が流れていましたが、横浜駅西口の再開発に伴い、その区間は埋め立てられています。また、二次派川として昭和に整備された「派新田間川」についても、平成9年に完成した帷子川分水路の整備に伴い、新田間川と分断されるような現在の姿に埋め立てられました。「幸川」は、昭和39年に河川法が改正された時に二級河川に指定されており、内海橋を境に新田間川から名称が変わります。

Column コラム “新田間(あらたま)”の名前の由来

新田 (左岸側：安永新田・弘化新田) と新田 (右岸側：岡野新田) の間に架けられたため、「新田間橋」と名付けられました。当初は、岡野新田に架かる橋から、「岡野橋」と名付けられる予定でしたが、歌心のあった開発者の岡野勘四郎はこれを断り、“新田間”と命名しました。

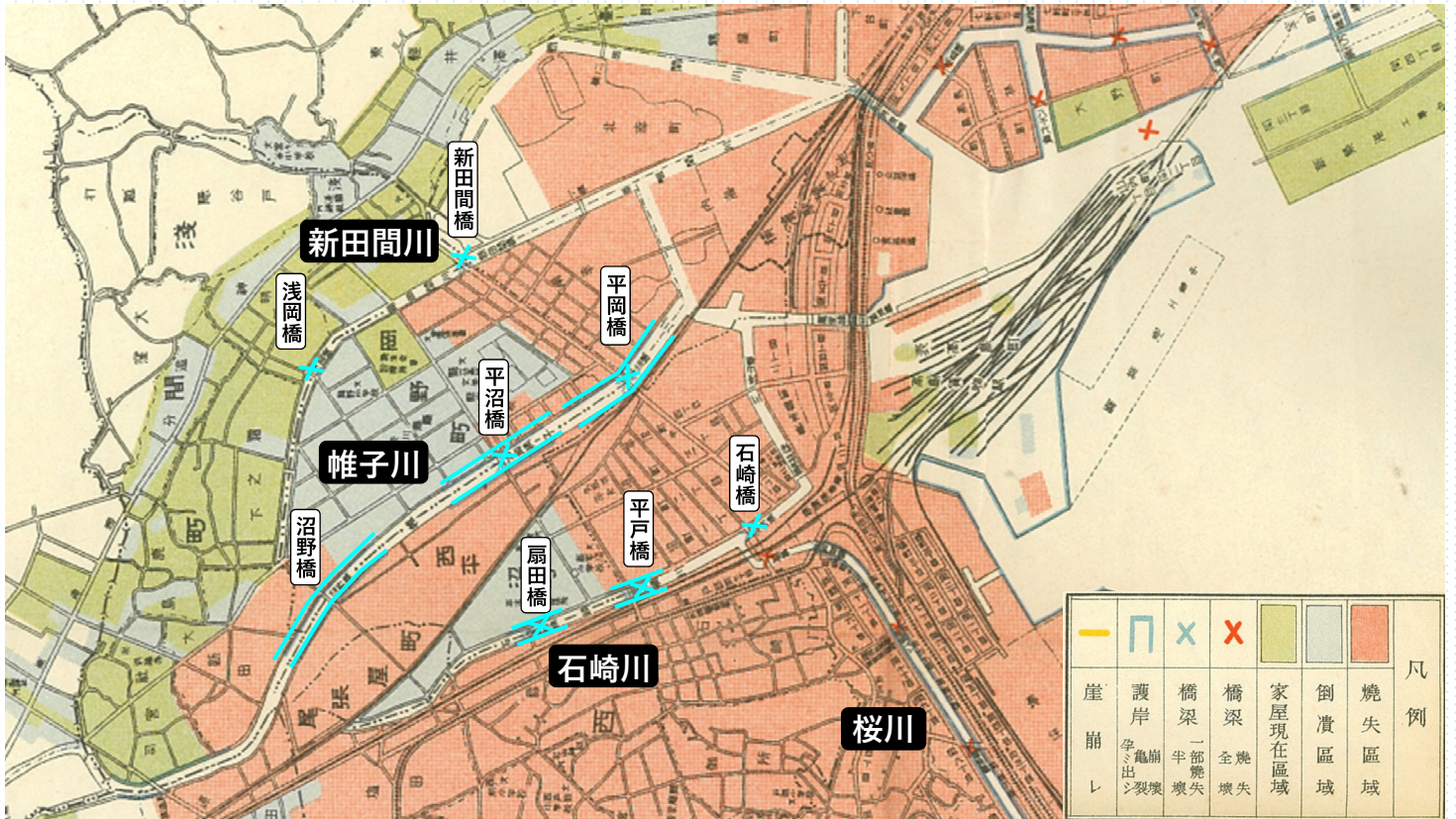
引用・参考) F：道路局橋梁課所蔵

G：横浜都市発展記念館所蔵

H～J：国土地理院ウェブサイト (<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>) をもとに河川企画課作成

4 関東大震災による河川の被害

大正12年の関東大震災では、低平地にあった市街密集地（関内・旧吉田新田地区及び戸部・平沼地区）の殆どが、周辺の丘陵地（山手地区や野毛山）でも多くの家屋が焼失するなど、火災による被害を大きく受けました。河川にも影響は及び、護岸には、崩壊・亀裂・孕み出しが発生し、帷子川と石崎川に架かる多くの橋梁で、一部焼失・半壊する被害を受けました。



K 震災被害図 大正12年（1923）頃



① 帷子川（萬里橋付近の護岸の火災）② 帷子川（萬里橋付近の護岸全壊と橋梁の破壊）③ 帷子川（表高島町の舟揚場の損傷）



④ 石崎川（扇田橋付近の護岸の全壊）⑤ 石崎川（石崎橋付近の護岸に亀裂）⑥ 石崎川（石崎橋下流の護岸の破壊）

L 関東大震災による帷子川水系の被害状況



帷子川は、富士山噴火や関東大震災のような大きな災害の影響を受けながらも、横浜の街と一緒に、色々な時代を過ごしてきたんだね！